

小田原市教育委員会協議会会議録

1 日時 平成20年1月24日(木) 午後7時5分～午後7時50分

場所 小田原市役所 601会議室

2 出席した教育委員の氏名

1番委員 山田浩子

2番委員 青木秀夫 (教育長)

3番委員 桑原妙子

4番委員 安藤實英 (教育委員長)

5番委員 横田俊一郎 (教育委員長職務代理者)

3 説明等のため出席した教育委員会職員の氏名

学校教育部長 和田豊

教育政策課長 曾我勉

学校教育課長 佐宗修二

教職員担当課長 柳下正祐

教育研究所長 小宮郁夫

学校教育課課長補佐兼指導主事・指導担当主査事務取扱 長澤貴

教育研究所主幹・指導主事 中畑幹雄

(事務局)

教育政策課課長補佐・教育政策担当主査事務取扱 杉山博之

教育政策課主査 望月啓一郎

4 議事

(1) 報告事項

① 平成19年度 全国学力・学習状況調査の本市の分析結果について

(学校教育課)

5 議事の概要

(1) 報告事項

① 平成19年度 全国学力・学習状況調査の本市の分析結果について

(学校教育課)

学校教育課長…報告事項「平成19年度 全国学力・学習状況調査の本市の分析結果について」御報告させていただきます。資料1をご覧ください。なお、参考資料として、「平成19年度全国学力・学習状況調査（神奈川県）の結果と分析、並びに今後の指導への示唆」を添付しております。

まず、教科に関してですが、市内の児童・生徒の結果について、全体的な傾向、並びに、設問ごとに全国や県全体の結果と比較し、特徴的な傾向の見られた点について、その傾向と今後の指導のポイントを示したものでございます。国語A国語Bについては、小、中学校ともに、本市の平均正答率は、全国、神奈川県全体の平均正答率とほぼ同程度であります。国語Aについては、学習内容を概ね理解していると考えられます。全国の傾向と同様に国語Bの平均正答率が低いことから、知識・技能を活用する力に課題があります。今後の指導については、国語の学習に自ら取り組む子どもを育てていくことを目指す必要があります。特に子どもが目的意識をもって意欲的な学習ができるような計画を工夫する必要があります。また、効果的な評価と授業改善が必要であります。

基礎・基本となる国語Aにつきましては、漢字の読み書きについては、その定着については十分とはいえないので、使用頻度の高い漢字や語句を入口として、なじみの薄い漢字や語句にも目を向け、実生活に生きる言語の幅を持たせる必要があります。学校では、漢字について早い段階から児童が読む機会を多くする。漢字や語句のもつ意味や使い方、関連した熟語なども総合的に学ばせていく。掲示物等教室環境を整える。日常生活で使い、確実な定着を図る。辞書などの活用も大事だということでございます。教育委員会では、漢字や語句、言葉のきまりについての知識・技能を身に付け、日常生活で表現や理解に役立てることへの興味と関心を高めながら確実な定着を図る必要があります。

活用する能力を身に付ける国語Bにつきましては、自らの見方や考え方をもち、主体的に表現していくことに関する設問で無解答の児童・生徒が

多いという傾向が見られました。国語の授業で「考える」時間を作り、発信する場を設けることにより、「受信」―「思考」―「発信」のプロセスを重視した授業へと改善を図る必要があります。学校では、校内研究等において、国語の学習指導法を工夫し、改善を図ります。これにより、学びあって生きて働く言語能力を身に付けることができます。保護者・地域に働きかけ、協力が得られるように努めます。教育委員会では、授業の様々な場面で「考える時間」が作られ、考えたことを発信する場が設けられるように、指導法の不断の改善を学校訪問等の機会を捉えて継続的に指導してまいりたいと思います。

続きまして、算数、数学でございます。全体的な傾向として、小、中学校数学A・Bともに、市の平均正答率は、全国及び県全体の平均正答率とほぼ同程度であります。問題Aが概ね良好であるのに対して、問題Bの活用する力に課題があります。

今後の指導につきましては、基礎・基本の算数・数学Aにつきましては、乗除先行の理解などの定着が十分でない面が見られます。計算技能の確実な定着を図る必要があります。学校では、計算技能の確実な定着を図るために、自ら「どんな既習事項が使えるか。」など、計算方法を作り上げていくような指導方法の工夫をする必要があります。引き続き、今後も、授業とショートとの時間との関連を十分に図っていく必要があります。教育委員会では、教科学習やショートの時間・家庭学習等で身に付けた自らの力を実感・評価でき、進んで学習しようとする意欲を引き出すことができる機会を設けていきます。

活用する能力の算数・数学Bは、小学校における「計算の仕方の工夫で、別の計算に活用する方法を考えて説明する」といった設問においては、正答率が低いです。中学校における「理由を説明する」といった設問については、無解答の生徒が多い傾向があります。授業の中で、思考過程をじっくりと表現したり、互いの考えを検討したりする授業展開を大切にし、学びあいの質を高めていくことが必要であります。学校では、校内研究等で算数・数学の学習指導法を工夫し、改善を図ります。保護者・地域に働きかけ、協力が得られるように努めます。教育委員会では、学びあいの質を

高めるための指導の工夫がなされるように、指導法の研究を学校訪問等の機会を捉えて継続的に指導してまいりたいと考えています。

続きまして、質問紙調査の結果の分析及び今後の指導についてでございます。小田原市が推進している「おだわらっ子の約束」の理念に一致するものが多く見られます。特に、「おだわらっ子の約束」推進の観点から、「質問紙調査」の結果と「教科に関する調査」の結果との相関関係について分析をおこないました。

小田原市の大多数の児童・生徒は、基本的な生活習慣が身につけています。しかし、朝食を毎日きちんととっている児童・生徒の割合は、全国平均を下回っていました。また起床時刻・就寝時刻等の生活リズムに関しても、就寝時刻が遅い傾向にあります。改善が必要な児童・生徒の割合がやや高いところです。「質問紙調査」と「教科に関する調査結果」との相関関係> につきましては、ご覧のような児童・生徒がすべての教科において正答率が高い傾向が見られました。従来から学力面と基本的な生活習慣等との関連性については言われてきており、今回の調査によって、全国的にも裏付けられた形となったといえます。市内の結果においても「おだわらっ子の約束」がきちんと守れている児童・生徒が今回の教科の調査結果において高い正答率を得られる傾向が見られました。中学生の「質問紙調査」結果からは「人が困っているときは、進んで助けている」「人の気持ちが分かる人間になりたいと思う」などの問いに、肯定的な回答をしている市内の生徒の割合は、全国平均を上回っており、子どもたちに、他者を大切に育てて育ってきているものと考えられます。「確かな学力」の確実な定着とともに、引き続き、豊かな心の育成も大切な視点として今後の教育を推進していきたいと考えます。今回の調査結果からも、今後、学力の向上や豊かな心の育成に向けて、「おだわらっ子の約束」の理念を家庭・地域から着実に浸透させていくことが大切であると言えます。以上でございます。

(質 疑)

桑原委員…「PISA型読解力」とはどのようなものなのでしょうか。

学校教育課長…テキストをただ音読するのではなく、内容をしっかり理解して、それを

自分の経験と照らし合わせながら、自分の考えをまとめ表現できるような、段階的な読解力をいいます。

安藤委員長…国語の分野を見ますと、コミュニケーション能力の欠如が一番問われているような気がします。テレビの流行り言葉等に毒されて、子どもが正しい日本語がしゃべれない、また遊び等を通じた、子どもとの言葉の遣り取りがうまくできていない場面を多く見えています。少人数で、子どもが自分の考えを発表し合い、聞き合う取り組みをしている学校のことを以前聞いたことがあります、そういう力が欠けているような気がします。

学校教育課長…自分の考えをまとめる設問で無回答の子どもがいる。日常の授業の中で、教師が、少人数で話し合う機会や、物語や説明文に対し自分の考えを書くというような機会をつくっていただきたいところです。

桑原委員…表面的な読解はしますが、一步突っ込んで、どう感じるかと問われると、困ってしまうようですね。

学校教育課長…漢字を覚えるにしても、その意味を理解しないで覚えると、時間が経てば忘れてしまうということがあり、漢字練習でもその辺りが大事だと考えています。

桑原委員…漢字には一つ一つ意味があるわけで、自分の経験でも、例えば、歌を歌うときに息を遣いますが「息は自分の心と書く」と教えれば、子どもたちは忘れません。腰という字も「体の要」と教えれば、1年生でも覚えてしまいます。教え方次第とも思います。

横田委員…教える側に、そういう意識はあるのでしょうか。

学校教育課長…各学校でも、本市の分析結果を読み、生徒児童の現状を把握することで、確実な習得のために、お話のあったような意味理解まで教えるということになっていくものと考えます。

安藤委員長…日常生活の中で、正しい日本語が伝わる場面を持っていれば、そんなに難しくはないと思うのですが、今の日本ではそれができていないと思います。生活に密着した中で学ばないと、教科書だけではなかなか身体には染み込んでいかないと思います。

山田委員…朝食を毎日きちんと食べる児童・生徒の割合が全国平均を下回っているというのは意外でしたが、どの位違うのでしょうか。

学校教育課長…今、手元にデータがありませんが、数値は出ております。

安藤委員長…小田原は親の遠距離通勤が多いということもあるかもしれません。子どもにはしっかり食事をとらせるべきですし、勤務先と居住地の時間的距離は意識してあげないといけないと思います。

桑原委員…一緒に食事する時間がなくても、せめて用意するくらいのごことは、親として最低するべきことだと思います。

安藤委員長…思いますに、日本人の数学力は、そろばんがあった時代は結構高かった気がします。頭の中の計算機が消えてしまったのではないかと思います。学校では、そろばん塾があったり、授業で取り上げたりしているのでしょうか。

学校教育課長…授業の中では、3、4年生がわずかな時間ですが学んでいます。計算機は、基礎の計算を理解した上で、桁数が多くて計算が大変な場合に使用しており、何でも計算機というわけではありませんが、そろばんの時間数が少ないことは確かです。

安藤委員長…授業でなくても、そろばんクラブのようなものを作って、数学能力に結びつけていければと思いますが。

桑原委員…「読み書きそろばん」と言われたとおり、大事なことだと思います。

安藤委員長…コンピュータでそろばん以上の計算ができる時代になってしまいました。

横田委員…漢字も同じですね。今の若い人は、携帯電話で漢字を見て書くような時代になってしまいました。でも、これはもうもとはには戻れないのではないかと思います。

安藤委員長…確かに手書きよりも楽なわけですからね。子どもたちがコンピュータに接する機会が多いほど、そうになっていくでしょうね。

青木教育長…そろばんの話ですが、昔は、そろばん塾が盛んでしたが、計算機が登場してからは、後退していき、学校でも教材として採り上げられなくなっていたということだと思います。そろばんが計算力の大きな力になっていることは事実です。本市の子どもたちの学力の状況との関係で、算数の基礎基本の計算力を身につけさせる手立てとして、検討していく必要はあろうかなとは思っています。

桑原委員…最悪、そろばんは使わないとしても、暗算力は、日常において非常に大事

だと思えます。そういう授業の時間を多くするとか、何か小田原の特徴が出せれば良いと思えますが。

学校教育課長…短い時間を使って、そうした繰り返し学習を行うというのも、記憶の定着のために大事なことだと考えています。

安藤委員長…今はもうバーコードの時代の中で、実体験としての数字がどんどん消えてしまうような気がします。

山田委員…この資料とは直接関係ありませんが、今、小中学生の携帯電話所持率ほどのくらいでしょうか。長時間メールを打っていたり、危険なサイトにアクセスしたりなど、心配されることがあります。

教育研究所指導主事…今、教育研究所で、幼・小・中の生活実態調査というものを実施しております。今年度末にはまとめることになっています。携帯電話にかかる設問もありますので、お示しできると思えます。

桑原委員…ただ、親との連絡の必要もあるでしょうし、安全のために持つこともあり一概にダメとも言い切れず、使い方の問題だと思えます。

安藤委員長…先ほどの食事の話も含め、生活リズムの再構築というのは、市民レベルの問題でもあります。その意味でも「おだわらっ子の約束」の普及をどうしていくか、具体的な形を示し、親達にも訴えていけたらと考えます。そういう意味では、こういう調査結果を発信してもらうのも良いと思えます。

青木教育長…今日の新聞でも、学力と生活実態との相関関係についての記事があったかと思えます。こういう中で、小田原市の実態がどうなのか、それを踏まえて、学力の向上のためには、生活実態、習慣の向上を地域と一体になってやらなくてはいけないということにもなろうかと思えます。今回の調査結果の活用については、こうした点をもっと明らかにする必要があると思えます。

安藤委員長…先ほどのコミュニケーションも、相手のことを思いやりながら、様子を見ながらするものだということということを伝えるべきだと思えます。メールがあればできるんだと思われるのは悲惨だと思えます。

横田委員…この資料は、公表されるものなのですか。

学校教育部長…この概要版そのものを出すというよりも、内容を精査してもっと分かりやすい形で公表することを考えています。

安藤委員長…「県内では全国に比べ支援教育が多い傾向にある」とのことですが、これは顕著なものなのでしょうか。

学校教育課長…県の傾向についての詳細はわかりません。

桑原委員…支援教育の対象とするのに、何か基準があるのでしょうか。

横田委員…「就学指導委員会」というところで、例えば知能指数など、おおよその目安を判断をしますが、拘束力はありません。最終的に教育委員会が個々に面談した上で決まります。

桑原委員…神奈川県は何か基準が他県とは違うのでしょうか。

横田委員…今は、発達障害、情緒障害の子どもが全国的に多くなっていますが、この捉え方が違うかもしれません。

桑原委員…都会の方が多いいいことでしょうか。

青木教育長…多いかもしれませんし、受け皿があるから数も多くなるということかもしれません。

横田委員…本市ではどうでしょうか。

学校教育課長…今、データはありませんが、徐々に増えているところです。

横田委員…私が13、14年前に就学指導委員会に関わってから、現在まで、かかる件数は倍くらい違います。

桑原委員…生活のリズムの目まぐるしさも関係してくるのでしょうか。

横田委員…親子関係や環境ホルモンなど、いろいろな要因があると思われます。

安藤委員長…親子で言葉のキャッチボールができていないこともあると思います。大人が親としての自覚に欠けることがあります。親の資質が問われていると思います。

(その他質疑・応答なし・協議会を終了)